人文地理学研究　**34**　2014　73–85

華人社会・チャイナタウン研究からみたフィールドワークの方法
― 体験から考える ―

山下清海

キーワード：フィールドワーク，地域調査，華人，チャイナタウン，エスニック地理学

Ⅰ　はじめに

地理学の研究において，フィールドワークがいかに重要であるのかについては，あらためて述べる必要はないだろう．人文地理学のフィールドワークの考え方や方法に関連しては，尾留川編（1972，1976），杉本（1983），市川（1985）などの専門書･啓蒙書がある．また野間ほか編（2012）は，フィールドワークも含めて，人文地理学の調査・研究の方法を平易に解説している．筆者も，すでに地域調査全般に関連して，フィールドワークの方法，景観観察，聞き取り，記録の方法（フィールドノート），データの整理，文献収集などについて論じた（山下，2003）．

筆者自身は決して優れたフィールドワーカーではないが，本稿では，筆者が卒業論文の執筆以来取り組んできた華人社会やチャイナタウンを中心とするエスニック地理学に関連するフィールドワークの体験を通して（山下編，2005，2008，2011），人文地理学におけるフィールドワークの方法について考えてみたい．熟練の研究者にとっては自明のことばかりであろうが，これからフィールドワークに取り組んで論文を執筆しようとしている若い研究者に，いくらかでも参考になれば幸いである．

Ⅱ　初期のフィールドワーク体験から

Ⅱ－１　南伊豆の半農半漁村
－フィールドワークの“原点”－

筆者は1971年に東京教育大学理学部地学科地理学専攻に入学し，２年生および３年生の時に人文地理学，地形学，水文学などの巡検に参加した．初めてのフィールドワークを体験し，人文地理学だけでなく自然地理学を含めたフィールドワークの方法を，フィールド（調査対象地域）で学び，教室での講義や演習とは異なる聞き取り調査，土地利用調査，景観観察，地形・気候・水文などの観測などを実践的に学ぶことができた．

1975年に筑波大学大学院地球科学研究科地理学・水文学専攻に進学し，人文地理学をより専門的に研究するようになった．人文地理学講座では，毎年，静岡県下田市の筑波大学附属の臨海実験場（現・筑波大学下田臨海実験センター）に１週間滞在し，南伊豆の半農半漁村の調査を続けていた（尾留川・山本編，1978；田林，2014）．その巡検のやり方は，次のとおりである．

山本正三先生（現・筑波大学名誉教授）および高橋伸夫先生（筑波大学名誉教授，2013年死去）の指導のもと，先輩の大学院生が入学間もない大学院生にフィールドワークの基礎を教え込むシステムになっていた．複数の班に分かれ，それぞれ担当する研究対象地区を受け持っていた．筆者が

修士１年生の時に参加した巡検では，下田市の田牛（とうじ）地区を担当した．その際，フィールドワークの実践的な指導をしてくださったのは，当時，博士課程２年生の田林　明先生（現・筑波大学名誉教授）であった．田牛では，おもにイセエビ・アワビ漁を中心とした漁業の変化と民宿経営などについて調査した（田林ほか，1978）．統計など数量的なデータが限られているなかで，漁業組合の倉庫の中から漁獲に関する古い資料を探し出し，それをもとに図化したり，漁民から詳細な聞き取りを行う方法などを，田林先生から学んだ．その際，ひとりで質問しながら，フィールドノートに詳細に記録されていく田林先生を傍で見ていて非常に参考になった．公表されている統計データだけでなく，被調査者の個人的な記録やさまざまな体験談などの質的データの重要性を学ぶことができた．とりわけフィールドノートへの記録がいかに大切であるかを，この時初めて気づいた．しかし，当時の筆者は，研究テーマに関して自分なりの問題意識もなく，フィールドワークで何をしたらよいのか，何を聞いたらよいのか，何が重要なのかもわからず，ただ先輩の大学院生のあとについていくだけであった．

学部・大学院時代には，人文地理学の巡検だけでなく，佐渡における海岸段丘に関する地形学巡検，栃木県今市扇状地および神戸の西神ニュータウン開発に伴う地下水･河川に関する水文学巡検，菅平高原における気候学巡検などにも参加した．自然地理学の巡検の経験は，特にアメリカ，ヨーロッパ，中国，東南アジア，インド，ブラジルなどでの海外調査に出かけた際に非常に役に立った．

Ⅱ－２　横浜中華街でのフィールドワーク

修士１年生のゼミで紹介すべき英語論文の選択では，大いに悩んだ．現在のようにインターネットの文献データベースが利用できるわけではないので，Annals of the Association of American Geographers, Geographical Review, Economic Geography,などの海外の著名な地理学雑誌のページをめくりながら，興味のある論文がないか探し回った．実際に論文の内容を見ながら論文を探す過程は，非常によい勉強になり，人文地理学のテーマの幅の広さを認識することができた．今日では，興味のあるキーワードを文献データベースに入力し，ヒットした論文の中から，内容をよく理解しないまま消化不良の論文紹介をする院生が少なくないが，かつてのような地道な論文選択の過程は，非常に貴重であった．

筆者が実際に大学院のゼミで紹介した英語論文の中でも，非常に刺激を受けたのは，世界の華人の分布と職業について論じたChang（1968）と，ボストンのチャイナタウンに関するMurphey（1952）の論文であった．Changの論文は，世界中に広く分布する華人の現地社会への適応の地域的性格と普遍的性格について考察しており非常に興味深かった．いずれ世界中の華人社会やチャイナタウンについてフィールドワークをしてみたいという筆者の研究目標がこの論文を読んで決まった．また，Murheyの論文は，sequent occupance論の考え方にもとづいて，ボストンのチャイナタウンの変遷を描写していた．では，横浜中華街，神戸南京町，長崎新地中華街はどのようにして形成され，いかに変容してきたのだろうかという研究課題が筆者の頭の中に浮かんできた．

当時，筆者は大学院のゼミで紹介する英語論文は日本語に全訳するようにしていた．全訳することにより，詳細な部分も理解することができ，和訳した日本語の不自然さから，内容の理解の誤りに気付いた．外国語の日本語への翻訳の経験は，論文や本を書く際の日本語の文章力の向上に大いに役に立ったことは，あとになって気づいた．

上記の大学院ゼミでの英語論文紹介により，筆者は，横浜中華街の研究で修士論文を書くことに決めた．そして，自分で決めた修士論文の研究計画にもとづいて，横浜中華街でフィールドワークを開始した．これまでの大学院の授業の一環としての巡検とは異なり，自分ひとりで調査計画を立て，試行錯誤で聞き取り調査，店舗の分布図などの作成を試みた．

最も難しかったのは，中国料理店をはじめ中国人経営の店舗での聞き取りであった．手当たり次第に飛び込みで訪問して，「話を聞かせてください」と頼んだ．多くの場合，「忙しいから」と断られた．なかには，「もし，あなたが週刊誌の記者だったら，うちの店のＰＲになるから，喜んで話をしてあげるよ．あなたの調査に協力して，うちの店に何かよいことがあるの？」と言われたこともある．そこで筆者が学んだのは，聞き取り調査の場合には，相手の立場になって考える，と言うことである．インフォーマントに対して一方的に聞き取るだけでなく，相手の話を聞きながら，自分のフィールドワークの経験から，相手が関心を持っているようなことを話すように心がけた．もちろん，調査の個人情報の秘匿に注意することは言うまでもない．中国料理店を対象とした聞き取りの訪問時のタイミングについては，年末年始などの繁忙期やランチやディナータイムの忙しい時間帯は当然避けなければならない．この時以来，世界のどこのチャイナタウンで調査する際にも，客が少なくなった頃に中国料理店に入って料理を注文し，客になりながら，店内で話を聞くようにしている．

横浜中華街の修士論文の調査では，聞き取り項目を書いた質問用紙にもとづいて実施した．しかし，フィールドワークの経験が乏しい当時の筆者では，質問が尋問調になり，それぞれの聞き取り相手がもっている個別の特徴を生かした内容を聞き出すことはできなかった．聞き取りにおいては，「この人だったら，こんなことが聞けるのではないだろうか」という，経験に裏打ちされた研究者としての勘が重要である．

横浜中華街のフィールドワークで最も悩ましかったのは，中国内部の政治的対立であった．聞き取り調査をしている時に，「あなたは台湾派，それとも大陸派？」と言われたことがよくあった．「それがわからないと話ができない」という意味合いのようでであった．そこで，「僕はどちらでもないです」と答えると，「だったら，公安の方？」と嫌みたっぷりに言われた．「公安」とは，警察の外事部門，いわゆる公安警察を意味していた．横浜中華街では，第二次世界大戦後，1949年に中華人民共和国が建国され，台湾の中華民国政府との対立の影響を受けて，中華学校も華僑総会も，大陸支持派と台湾支持派の二つに分裂していた．この厳しい政治的対立が緩和されるようになったのは，1986年元旦の火災で被害を受けた関帝廟を両者が協力して1990年に再建してからである．

聞き取り調査に行き詰っていた時に，ある台湾人留学生から横浜中華学院の先生を紹介してもらった．その先生を訪問して筆者の修士論文の構想を話すと，「そのようなことなら，杜先生が詳しいです」と言い，紹介してもらったのが杜国輝先生であった．杜国輝先生は筆者の研究に理解を示され，全面的に筆者の研究に協力してくださった．そして，私の研究に協力してくれそうな知人を紹介してくれた．さらに，その方はまた別の人を紹介してくれ，しだいに研究協力者が増えていった．のちに杜国輝先生自身も，華人研究に取り組まれ（杜，1991），横浜中華学院の校長を務められた．

ここで，筆者が教訓として得たことは，「よい人は，よい友人・知人をもっており，よいネットワークを築いている」ということである．このように，フィールドワークにおいては，自分の研究にとって，キーパーソンとなる人物を見つけることが非常に重要である．ただし，当時，横浜中華街のフィールドワークでは，台湾派のルートに偏りすぎて，私も台湾派であるとみなされないように気を付けて行動した．

このため，修士論文を加筆修正して「人文地理」（人文地理学会）に掲載された論文（山下，1979）の謝辞には，調査でお世話になった中国人の氏名は，ひとりも記さなかった．政治的対立が厳しい中では，大陸派，台湾派の方々に迷惑をかけることになるからである．これは，今でいえば調査協力者の個人情報保護にあたるものである．その後1990年代になると，中国人留学生が台湾系の横浜中華学院で杜国輝校長から聞き取りをして論文を発表するようになった．

Ⅱ－３　シンガポール留学および東南アジアにおけるフィールドワーク

１）シンガポールにおけるフィールドワーク

大学２年生の終わりの春休みに，筆者はひとりでリュックサックを背負って，東南アジアを旅した．まだ，バックパッカーという言葉も，“Lonely Planet”や『地球の歩き方』などの個人旅行者向けのガイドブックもない時代であった．その42日間のひとり旅の経験で，筆者は東南アジアの社会・文化の多様性を知り，将来は東南アジア地域研究者になることを決めた．そのためには，大学院に進学し，東南アジア留学を目指すことにした．

卒業論文は「タイの民族地理学的研究」と題して，平地で稲作に従事する主要民族のタイ族，都市に居住し経済面で優位な華人，そして山地で焼畑を行う少数民族からなるタイの複合社会について，日本語と英語の文献を中心にまとめた．卒業論文では，ひとり旅の経験を活かしたものの，本格的なフィールドワークを行わなかったので，修士論文では，フィールドワークにもとづく研究テーマを模索した．結局，将来の東南アジア地域研究に役に立つテーマとして，横浜中華街をフィールドにすることにした．

大学院博士課程（５年一貫制）の４年の時に，文部省アジア諸国等派遣留学生（当時，全国で定員７名）に選ばれ，シンガポールにあった南洋大学[1)]の文学院地理系に1978年から２年間留学することができた（写真１）．

南洋大学を留学先に選んだ最大の理由は，南洋大学がシンガポール・マレーシアを中心とする東南アジア華人が自らの手によって1956年に設立された大学であるからであった．東南アジアを理解する際には，華人社会を研究することが重要と考え，筆者は南洋大学で東南アジア華人社会について研究することにした．

南洋大学では，設立以来，標準中国語（いわゆる北京語，現地では「華語」または「華文」と呼ばれる）で講義が行われてきたが，1975年から，中文系を除き講義は英語で行われることになった．しかし，筆者が留学した1978年当時，講義は英語でも，学生の多くは南洋大学入学まで華語で授業が行われる学校の卒業生であり，講義中以外の日常会話では華語がよく使用されていた．

学部時代の筆者の第２外国語はドイツ語であった．筆者は大学院に入ってから，当時，神田古本屋街の中国専門書店，内山書店の上階にあった日中学院に週３日，夜間の中国語クラスに通って，中国語を基礎から勉強した．しかし，留学当初，南洋大学の学生，教職員の話す華語は，ほとんど聞き取れなかった．彼らは筆者に対して，決して中国語の方言を話していたわけではなく，華語を話していたが，当時の筆者には，華人の会話のスピードはあまりにも速く感じられ，筆者の拙い能力ではついていけなかった．

そこで，学生宿舎に住んでいた筆者は，いつもメモ帳を持ち歩き，学生と話す際には，片っ端からわからない言葉を書いてもらって，あとで辞書で調べた．話題についていくために，中国語新聞をていねいに読んだ．教員との会話はフォーマルになりがちだが，学生や食堂の従業員などとの会話はリラックスできた．週末には，たいてい台湾，香港，中国大陸などの映画を見に出かけた．カンフーなどの時代劇に比べ，恋愛映画の現代劇は中国語会話の学習の大きな助けになった．スクリーンの下に出てくる中国語の字幕は，最良のテキストだった（山下，1994）．

写真１　南洋大学の華語授業のクラス（1979年）

華人，マレー人，インド人の学生とともに．右端は筆者．

大学入学まで英語で授業をする学校を卒業した華人学生は，漢字の読み書きもほとんどできなかった．

南洋大学の学生宿舎に住んでいたため，毎日の夕食は，華人学生とテーブルを囲んで，華語で会話することになった．そのおかげで，筆者の拙かった華語も，しだいに上達していった．と同時に，華人の習慣，思考・行動様式なども知ることができ，毎日，フィールドワークをしている状況であった．そして，忘れないうちにフィールドノートに詳細に記録し続けた．年齢が若いせいもあって，毎日，発見の連続の日々であった．

留学の２年間は，現地の華語新聞である「星洲日報」を購読し，食堂でもう一つの華語新聞である「南洋商報」と英語新聞の“Strait Times”を読むようにしていた．現地の新聞を読むことは，フィールドワークでは非常に重要であり，現地の人びとへの聞き取り調査でも，非常に役に立った．今日でも，日本語と英語以外に，もう一つの外国語である中国語による情報を収集できることは，世界各地の状況を知るうえできわめて有用である．

南洋大学には，華語研究センターがあり，日本人やソ連人などの外国人が中国語を学んでいた．今になって悔やまれるのは，学費を惜しまず，筆者も華語研究センターで華語を学んでおけば，もっと正確な華語の会話ができるようになったにちがいないことである．外国語学習では，ある時期に集中して，外国語教育専門の教員から学ぶことが重要である．

２）東南アジアにおけるフィールドワーク

シンガポールに２年間留学している際に，周辺の東南アジア各国のチャイナタウンを調査した．隣国のマレーシアへは，ジョホール水道を通って，バスやマラヤ鉄道で何度も出かけた．そのほか，インドネシア，ブルネイ，フィリピン，タイ，ビルマ（ミャンマー）もひとりで歩き回った．しかし，留学当時は，ベトナム・ラオス・カンボジアのインドシナ３国は戦争のため，残念ながら訪れることができなかった．東南アジア各国を訪れて，いつも感じたことは，どこにもチャイナタウンがあり，中国語を使用する機会があり，中国語ができると，華人から現地の生の状況を聞くことができるということであった．文献情報も乏しく，チャイナタウンの地図もない当時の状況では，自分自身が観察したこと，聞き取りしたことを記録したフィールドノートこそが，何よりも貴重な情報であった．

シンガポール留学を終えて，４年ほど後に月刊誌『地理』（古今書院）に，東南アジアのチャイナタウンについて連載記事を書いた．それに加筆して生まれて初めて出版した本は，読売新聞の文化欄や毎日新聞の書評欄[2)]でも紹介され，地理学関係者以外の方々からも拙著に関心を持ってもらえたことに喜びを感じた．筆者は，研究者が本や論文を書く際に，フィールドワークの「臨場感」を伝えることは，非常に重要であると思っている．そのためには，原稿はできるだけ現地で書くことである．1992年，ベトナムのホーチミン市（サイゴン）のチョロン地区のチャイナタウンを初めて訪れた．ベトナム戦争後のチョロン地区のチャイナタウンについては断片的な報道がある程度で，実情はまだ知られていなかった．だからこそ，フィールドワークで知った情報を，多くの人に早く伝えたいと思い，ホーチミン市滞在中に，チョロンのチャイナタウンについて原稿を書いた．この原稿は，帰国後まもなく読売新聞夕刊の文化欄に２回に分けて掲載された[3)]．文章の書き方やフィールドワークの成果をいかに文章に表現するのかについては，木下（1981），野村（2008）が参考になる．

原稿の執筆だけでなく，現地滞在中にやっておくべきことは，フィールドワークをもとに書く予定の論文の構成（章立て）を考えることである．一般的には，論文の構想をある程度頭の中では考えながらフィールドワークを行っているのであろうが，往々にして，論文の詳しい構成は，大学に戻ってからゆっくり考えようという場合が多いのではなかろうか．論文の構成案はできるだけ詳しい方がよく，章だけでなく節や項まで作成することにより，論文の目的やオリジナリティがより鮮明になると同時に，残りのフィールドワークの期

間内に取り組んでおくべき課題がわかってくる．さらに，フィールドワークの途中で，自分が書こうとしている仮のタイトルを考えておくことも有効である．論文の内容が決まってないのに，論文のタイトルを考えるのは早すぎると思われるかもしれないが，論文のタイトルには，必ずキーワードが含まれるはずである．自分が取り組んでいる研究のキーワードが何であるのかを，フィールドにおいて考えておくことは重要である．論文のタイトルには，研究の目的や研究視点も反映されているはずである．論文の仮のタイトルもつけることができない場合には，進めてきたフィールドワークの計画を再考すべきなのかもしれない．

ここで，フィールドノートの記録から，筆者が本を書いた実例を紹介しておきたい．

写真２は，1979年，ビルマ（ミャンマー）北部の中心都市マンダレーにおける筆者のフィールドノートの記録である．当時，初対面の華人から話を聞くのに，フィールドノートを出していては警戒されるので，聞き取りの後，記憶が鮮明なうちに，フィールドノートにできるだけ完全な文章で記録することにしていた．この記録をもとにして原稿を書いて，最終的に本になった文章は次のとおりである．

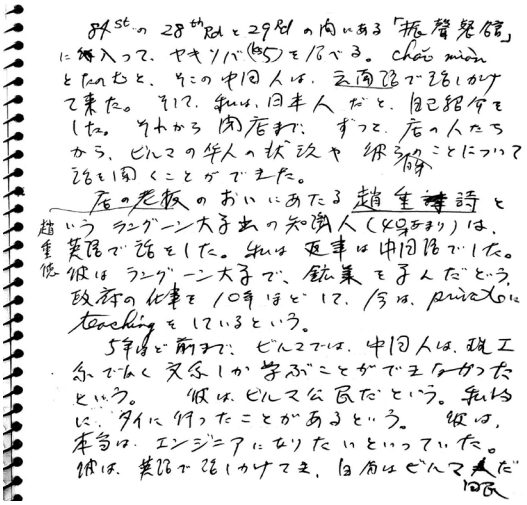

84st.の28thRdと29Rdの間にある「振聲飯館」に飛入って、ヤキソバ(Rs5)を食べる。chao mian とたのむと、そこの中国人は、雲南語で話しかけて来た。そして、私は、日本人だと、自己紹介をした。それから向席まで、ずっと、店の人たちから、ビルマの華人の状況や、紹介のことについて話を聞くことができた。
店の老板のおいにあたる趙生詩と趙生詩というラングーン大学出の知識人(父母ともり)は、英語で話をした。私は更事は中国語でした。彼はラングーン大学で、鉱業を学んだという。政府の仕事を10年ほどして、今は、private に teaching をしているという。
5年ほど前まで、ビルマでは、中国人は、現工ふでなく文ふしか学ぶことができなかったという。彼は、ビルマ公民だという。私は、タイに行ったことがあるという。彼は、本当は、エンジニアになりたいといっていた。彼は、英語で話しかけて来、自分はビルマ人だ 中国

写真２　マンダレーのチャイナタウン調査時のフィールドノート（1979年）

第八四街（84th Street）のある小さな中国料理店に入ってみた．「炒麺（チャオミエン）！」と叫んで焼ソバを注文すると，店主の妻が雲南方言で話しかけてきた．彼女は私を雲南人と思ったそうである．雲南方言はもともと標準中国語（いわゆる北京語）にかなり近いようだ．ちょうど店主の親類もこの店を訪れていた．私は，標準中国語を自由に操り，知識豊富なこの金という姓の男性にたいへん興味を抱いた．そして，翌日も彼から話を聞いた．

金氏の出身は，雲南省騰衝県である．騰衝は古くからミャンマーへの交通の要衝として栄えたところであり，日中戦争中はビルマ・ルートの雲南省側の拠点の一つであった．マンダレーの雲南人の中には，この騰衝県出身者が多い．1955年，金氏が22歳の時，彼は妻子を残したまま単身でマンダレーに逃げてきた．その理由について金氏は，もともと地主階級の出身であつたこと，そしてある法を犯したので妻子のもとに帰るわけにはいかないということを言葉少なに話してくれた．　（山下，1987，p.188）

Ⅲ　フィールドワークにおける地図化

Ⅲ－１　マンダレーのチャイナタウンの地図化

フィールドワークでは，聞き取りや観察が重要であるが，収集したデータは可能な限り，図や表にする必要がある．特に地図化することは，フィールドワークを実施しているさまざまな学問の中で，地理学の“武器”ともいえる．

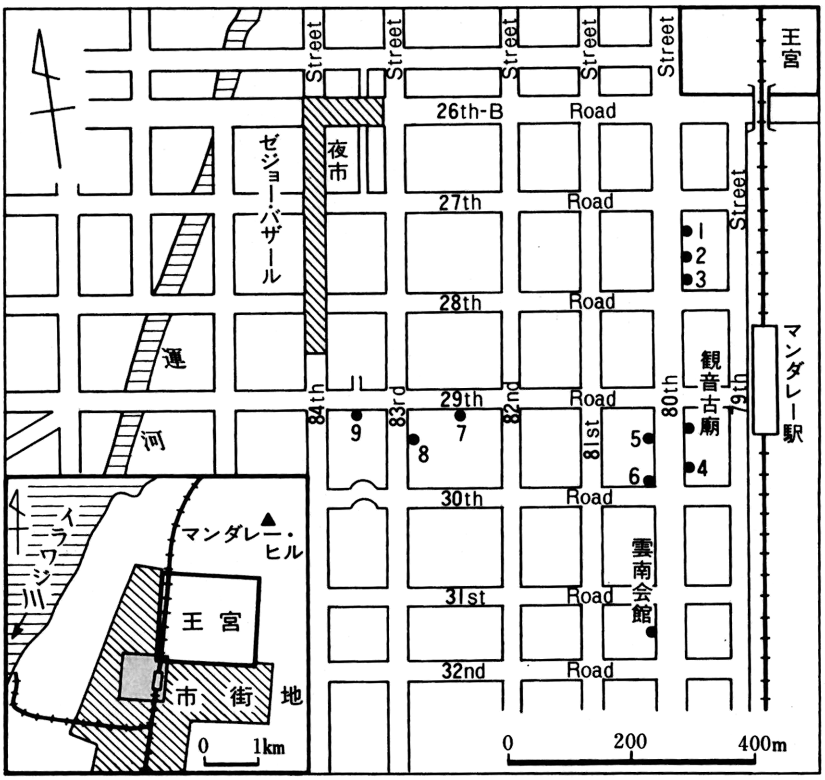
地図化に関して，筆者の経験を２例紹介したい．まず，ベースマップも全くないところで，地図を作った例である．1979年，ビルマ北部の主要都市マンダレーにおけるチャイナタウンの調査においてである．当時，ビルマはネ・ウイン将軍率いる独自のビルマ式社会主義を実施しており，半ば鎖国状態にあった．このため開発は遅れ，筆者がマンダレーに到着しても簡単な地図さえ全く入手できず，途方に暮れてしまった．とにかく街中を歩いているうちに，イギリスの植民地化で形成された市街地は，碁盤目状の道路パターンになっており，通りの名称は数字が用いられていたことがわ

かった．そこで，筆者はフィールドノートのページに縦線と横線を描いて，とりあえずこれをベースマップとして，華人の会館（団体）や廟などの分布を記していった．その後，隣国タイのバンコクの書店で，マンダレーの地図を入手することができ，作成したのが第１図ある．2009年，筆者はマンダレーを再訪したが，当時作成したこの図は，正確なものであったことを確認した．

Ⅲ－２　コルカタのチャイナタウンの地図化

今日では，以前に比べさまざまな地図が比較的容易に入手できるようになった．しかし，大縮尺の地図は，都市郊外や農村部になると，フィールドワークに必要な適当な地図が入手できない場合が多い．

2009年，筆者はインドのコルカタのチャイナタウンのフィールドワークを行った（山下，2009）．インドは大国でありながら華人人口は少なく，インドのチャイナタウンはコルカタにしか存在しない．コルカタの中心部のチャイナタウンの位置については，事前にある程度の目途は立っていた．しかし，中国語のインターネットで情報を検索すると，コルカタに新しく形成されたチャイナタウンがあるらしく，その位置については，現地を訪問するまでわからなかった．コルカタ中心部の衰退してしまったチャイナタウンの華人の廟で，中国語を解する華人に新しいチャイナタウンについて尋ねると，彼がタクシーに乗って案内してくれた．しかし，その場所がコルカタのどこに位置しているのかは，彼自身も私が持参している地図で



マンダレーのチャイナタウン
1. 曾氏館　2. 永靖聯誼会　3. 古城会館　4. 陳家館　5. 朱家館
6. 李隴西堂　7. 客属群治会館　8. 潮州同郷会　9. 鳳山寺

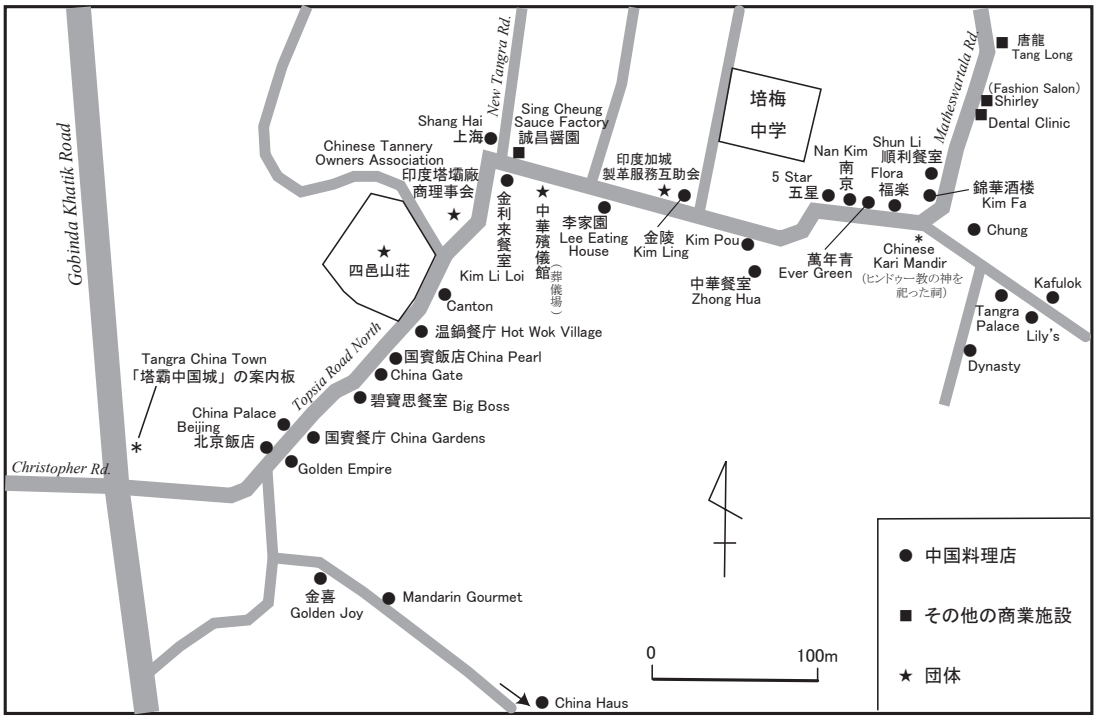
第１図　マンダレーのチャイナタウン（1979年調査）

（山下，1987，p.185）

示すことはできなかった．その地区の地名を尋ねても，地図には掲載されておらず，インターネットで検索しても出てこなかった．タクシーで移動する際に，行先を地図で追い，車窓の景観の特色や目印などを地図の上に書き込んだ．ホテルに戻りGoogleマップやその航空写真を何度も見ているうちに，新しいチャイナタウンのだいたいの位置が判明した．プリンターは持参していないので，Googleマップを拡大した地図をフィールドノートに描き写した．翌日，タクシーの運転手に私が行先を支持して，再びそのチャイナタウンを訪れることができた．このコルカタ東部のタングラ地区に形成されたチャイナタウンは（写真３），大通りから入った細い道路沿いに位置している．かつて華人が経営する皮革工場が集中していたが，近年，それらが中国料理店に変わって，チャイナタウンと化したところである．フリーハンドで地図をフィールドノートに書きながら，中国料理店の位置や名称（中国語表記とアルファベット表記の両方），その他関連施設などを記録した．帰国してからGoogleマップをベースマップとして地図化したものが，第２図である．

写真３　コルカタ，タングラ地区のチャイナタウンの案内板（2009年）

中国語，英語，ベンガル語，ヒンディー語の順で書かれている．「中国城」はチャイナタウンを意味する．



第２図　コルカタ，タングラ地区のチャイナタウン（2009年調査）

（山下，2009，p.44）

Ⅳ　フィールドワークから新たな研究アイディアの発見

Ⅳ－１　フィールドワークとデスクワーク

地域調査イコール，フィールドワークではない．フィールドに出かける前には，文献，統計，その他さまざまな情報を収集・整理し，フィールドワークの準備と具体的な計画を立てるデスクワークが重要である．事前のデスクワークは，フィールドワークの成功を左右する（山下，2003）．

優れたフィールドワーカーは，非常にもの知りである．その豊富な知識はどこからくるのであろうか．優れたフィールドワーカーは読書家でもある．論文や図書など広範な読書から多くの情報を得て，それらをフィールドワークにより確認し，あるいはフィールドワークで見つけた疑問を解くために，さらにデスクワークを行うからである．言うまでもないが，フィールドワークとデスクワークは，車の両輪である．

最近は，新聞記事データベースが充実してきている．従来の新聞縮刷版は東京発行の紙面を製本したものであった．インターネットで新聞記事データベースを検索して得られる地方版に掲載された記事を調べておくことは，フィールドワークに出かける前の必須のデスクワークの一つである．

Ⅳ－２　フィールドワークから研究のアイディアが生まれる
～「住み分け」の例～

横浜中華街に関する研究は少なくないが，筆者が修士論文で横浜中華街に関する研究を行う過程で，特に地理学的な課題であると気づいたことがある．明治の外国人居留地時代において，欧米人は山手居留地に居住したが，中華街が形成された土地は，かつて横浜新田であった埋め立て居留地であった．筆者は，これを欧米人と中国人の「住み分け」と捉えることができるのではないかと考えた（山下，1979，1991）．

中国人によるチャイナタウンの形成そのものも，エスニック集団の住み分けの例である（山下，1984）．筆者は，その後，留学したシンガポールでも，ラッフルズが1819年のシンガポールを植民地にした後に実施した都市計画には，当初からヨーロッパ人，華人，インド人，イスラム教徒との住み分けが内包されていた．シンガポールでは，イギリス人や華人の富裕層は，丘陵地に居住する傾向があり，彼らを主要顧客とする店舗が集中して形成されたのが，有名なショッピングストリートであるオーチャードロードの起源である．これは，横浜における元町商店街や神戸のトアロードの形成過程と共通する点が多い．

シンガポールと横浜の共通点を感じながら，筆者はシンガポールでの具体的な研究テーマの選定では大いに悩んだ．「研究のことで迷ったら，フィールドに行って考えよ」と具体的に誰かに言われたかどうかの記憶ははっきりしないが，とにかく地図を持って，シンガポールのチャイナタウンを歩き回った．その際のハプニングが，その後の筆者の博士論文のテーマ設定につながった．

ある日，都市再開発がまだ実施されていない広東人街を歩き回っている時に，偶然，小学校低学年くらいの子供が車に引かれた瞬間を目撃した．すると，近所の華人が家から飛び出て来て，車輪に挟まれている子供を助け出したが，その場では，全員が広東語を話していた．当時，シンガポール政府は華人に対して「方言をやめて華語を話そう」というキャンペーンを展開していたが（山下，1987，35-41），その場では誰ひとり，共通語となるべき華語や英語を話していなかった．そこに筆者は，華人方言集団の住み分けの状況を改めて実感した．このハプニングがきっかけなり，筆者は，シンガポールの華人方言集団の住み分けの研究を行うことにした（山下，1985，1988；Yamashita, 1986）．

Ⅳ－３　フィールドワークから研究アイディアが生まれる
～「ニューチャイナタウン」の例～

横浜中華街や東南アジアのチャイナタウンなど

に関する研究の後，筆者はさらに研究対象地域を広げ，世界各地でフィールドワークを実施するようになった（山下，2000）．各地のチャイナタウンを比較考察していく過程で，さまざまな新しい研究アイディアが浮かんでいった．言うまでもないことではあるが，複数の地域を比較することにより，地域的特性や多くの地域に共通する普遍的な特色が明らかになってくる．そして，それらの地域的特性や普遍性の要因の考察が次の研究課題となる．フィールドワークに取り組んでいる際に，さまざまなところで播いた種が，ある時，一斉に芽を吹くような知的興奮を感じることが，筆者にはしばしばある．

1994～1995年に，文部省在外研究員としてカリフォルニア大学バークリー校のAsian American Studiesでアメリカの華人社会・チャイナタウンの研究をしていた際に，日本とは違って，サンフランシスコやロサンゼルスなどでは，多くのニューチャイナタウンが形成されているのを実際に見た．その後，1997年に東洋大学国際地域学部に勤務するようになり，中国人留学生との会話の中で，「池袋」という地名を多く耳にするようになった．中国人留学生が「コンパをするなら池袋によい店が多い」，「主人とふたりで，最近，池袋に中国料理店を開いた」というような会話を聞いてから，何度も池袋を訪れるうちに，池袋駅北口界隈は，アメリカやカナダで見たニューチャイナタウンの萌芽期にあたると確信した．そして，横浜中華街・神戸南京町・長崎新地中華街のようなオールドチャイナタウン（Yamashita, 2003），いわゆる「中華街」とは異なることを明瞭にするために，自らいち早く2003年に「池袋チャイナタウン」と名付けた（山下，2010；Yamashita, 2013a）．

その後も，ヨーロッパ，ロシア，アメリカ，カナダ，ブラジル（山下，2007），オーストラリア，ニュージーランドなどで，華人社会・チャイナタウンのフィールドワークを実施する過程で（山下，2000），中国の改革開放政策後，急増している新華僑に強い関心を抱くようになってきた．その成果の一つとして，Yamashita（2013b）は，ニューチャイナタウンや新華僑に着目して，世界各地のチャイナタウンの類型化を試みたものである．

また，海外在住の華人の出身地は，中国では「僑郷」（「華僑の故郷」という意味）とよばれる．すでに筆者は，東南アジア華人の主要な出身地である福建省・広東省・海南省の僑郷について研究した（山下，2002）．僑郷への関心も，世界の華人社会・チャイナタウンのフィールドワークの過程で生まれてきたものである．フランス・イタリア・スペインなどの新華僑の中には，中国の浙江省温州市およびその西隣の麗水市青田県の出身者が多い（山下ほか，2012）．青田県は在日老華僑の主要な僑郷であり，プロ野球の王貞治氏の父親の故郷でもある．温州市・青田県，福建省福清市をはじめ新華僑の代表的な僑郷において，僑郷としての地域性，海外在留の新華僑と僑郷との結びつき，新華僑の海外への送出プロセスなどに関するフィールドワークを実施するようになった．

中国の僑郷における調査では，関連の統計・文献資料が乏しいなかで，フィールドワークこそがオリジナルデータになる．福建省福清市では，日本で不法残留しながら働き続け，故郷に豪邸を建てた人の体験を聞き取った（写真４；山下ほか，2010）．またハルビン郊外では，満州開拓団員として黒竜江省に渡り，終戦後は残留孤児となり，養父に虐待されながらも強く生き抜いた中国残留日本人老婦の苦難な体験をフィールドノートに記録した（山下ほか，2013）．

写真４　福建省福清市における日本出稼ぎ経験者への聞き取り（2007年）

V　おわりに

本稿では，筆者自身のこれまでのフィールドワークの体験を通して，人文地理学におけるフィールドワークの方法について考察した．個人的なフィールドワークの体験であり，華人社会・チャイナタウンなどエスニック地理学に関連するフィールドワークの狭い例である．しかし，人文地理学のフィールドワークの基本としては，共通するものが多いはずである．

一般に論文や図書の中では，著者自身がどのようなフィールドワークを実施したかどうかについては，あまり具体的に紹介されることはない．しかし，多くの研究者によるフィールドワークの具体的な方法を比較検討することは，人文地理学のフィールドワークの向上に貢献するはずである．

研究のアイディアや論文のストーリーは，フィールドワークを通して見えてくることが多い．フィールドワークの際に発見し，「このことは，まだ誰も知らない，気づいていないだろう」という「自己満足」が，フィールドワークへの意欲を高めると同時に，図書や論文の執筆への高いモティベーションを維持する原動力になる．

本研究は日本学術振興会･科学研究費補助金･基盤研究（A）（課題番号22242027, 平成22～25年度）「フィールドワーク方法論の体系化－データの取得・管理・分析・流通に関する研究－」（研究代表者：村山祐司），および日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（A）（課題番号232420522，平成23～26年度）「日本社会の多民族化に向けたエスニック・コンフリクトに関する応用地理学的研究」（研究代表者：山下清海）の成果の報告の一部である．

【注】

1）南洋大学は，シンガポール政府により，1980年７月にシンガポール大学と合併させられ，シンガポール国立大学となった．当時の状況については，山下（1987，42-45）に「南洋大学の『閉学』」と題して論評している．

2）毎日新聞　1987年５月４日（月），「新刊の窓」に掲載された『東南アジアのチャイナタウン』 の紹介文は次のとおりである．

　アジア各国の華僑は二千万人とも三千万人ともいわれているが，彼らは今や現地社会にしっかり根をおろし，その国の国民になりきっている．華僑の「僑」が意味する“仮住まい”の意識は薄れ，シンガポールなどでは華僑に代わって「華人（フアレン）」と呼ばれるようになった．著者は地理学を専攻する学者だが，学生時代から東南アジア各国を歩き，フィールドワークを重ね，地域によってさまざまな素顔を見せる華人たちの生活ぶりを紹介している．

3）山下清海「華人社会から見たベトナム（上）・（下）」．読売新聞（夕刊）「 文化」欄，1992年９月８日および９日．

［文　献］

市川健夫（1985）『フィールドワーク入門－地域調査のすすめ』古今書院．

木下是雄（1981）：『理科系の作文技術』中央公論社．

杉本尚次（1983）：『フィールドワークの方法』講談社．

田林　明（2014）：フィールドワークによる農業・農村地理学研究．藤田佳久・阿部和俊編：『日本の経済地理学50年』古今書院，102-111.

田林　明･山下清海･渡辺恭男･大嶽幸彦･菅野峰明（1978）：田牛－漁業の変遷と漁家の分化－．尾留川正平･山本正三編：『沿岸集落の生態－南伊豆における沿岸集落の地理学的研究－』二宮書店，99-112.

杜　国輝（1991）：『多文化社会における華僑･ 華人の対応－日本･ 台湾における華僑学校卒業生の動向分析』（トヨタ財団助成研究報告書），横浜中華学院．

野間晴雄・香川貴志・土平　博・河角龍典・小原丈明編（2012）:『ジオ・パルNEO －地理学・地域調査便利帖』海青社.
野村　進（2008）:『調べる技術・書く技術』講談社.
尾留川正平編（1972）:『人文地理学の基礎（現代地理調査法Ⅲ）』朝倉書店.
尾留川正平編（1976）:『地域調査（現代地理調査法Ⅳ）』朝倉書店.
尾留川正平・山本正三編（1978）:『沿岸集落の生態－南伊豆における沿岸集落の地理学的研究－』二宮書店.
山下清海（1979）：横浜中華街在留中国人の生活様式．人文地理，**31**，321-348.
山下清海（1984）：民族集団のすみわけに関する都市社会地理学的研究の展望．人文地理，**36**，312-326.
山下清海（1985）：シンガポールにおける華人方言集団のすみわけとその崩壊．地理学評論，**58**，295-317.
山下清海（1987）:『東南アジアのチャイナタウン』古今書院.
山下清海（1988）:『シンガポールの華人社会』大明堂.
山下清海（1991）：横浜中華街と華僑社会－開港から第二次世界大戦まで－．山本正三編：『首都圏の空間構造』二宮書店，211-220.
山下清海（1994）：アジア留学のすすめ．『留学事典'94　悩み解決Ｑ＆Ａ特集号』アルク，124-125.
山下清海（2000）:『チャイナタウン－世界に広がる華人ネットワーク－』丸善.
山下清海（2002）:『東南アジア華人社会と中国僑郷－華人・チャイナタウンの人文地理学的考察－』古今書院.
山下清海（2003）：地域調査法．村山祐司編：『地域研究（シリーズ＜人文地理学＞２）』朝倉書店．53-79.
山下清海（2007）：ブラジル・サンパウロ－東洋街の変容と中国新移民の増加－．華僑華人研究，**4**，81-98.
山下清海（2009）：インドの華人社会とチャイナタウン－コルカタを中心に－．　地理空間，**2**，32-50.
山下清海（2010）:『池袋チャイナタウン－都内最大の新華僑街の実像に迫る－』洋泉社
山下清海編（2005）:『華人社会がわかる本－中国から世界へ広がるネットワークの歴史，社会，文化－』明石書店.
山下清海編（2008）:『エスニック・ワールド－世界と日本のエスニック社会』明石書店.
山下清海編（2011）:『現代のエスニック社会を探る－理論からフィールドへ－』学文社
山下清海・小木裕文・張　貴民・杜　国慶（2012）：浙江省温州市近郊青田県の僑郷としての変容－日本老華僑の僑郷からヨーロッパ新華僑の僑郷へ．地理空間，**5**，1-26.
山下清海・小木裕文・張　貴民・杜　国慶（2013）：ハルビン市方正県の在日新華僑の僑郷としての発展．地理空間，**6**，95-120.
山下清海・小木裕文・松村公明・張　貴民・杜　国慶（2010）：福建省福清出身の在日新華僑とその僑郷．地理空間，**3**，1-23.
Chang, S.（1968）: The distribution and occupations of overseas Chinese. *Geographical Review*, **58**, 89-107.
Murphey, R.（1952）: Boston's Chinatown. *Economic Geography*, **28**, 244-255.
Yamashita, K.（1986）: The residential segregation of Chinese dialect groups in Singapore: with focus on the period before ca.1970. *Geographical Review of Japan*, **59**（Ser.B）（2）, 83-102.
Yamashita, K.（2003）: Formation and development of Chinatown in Japan: Chinatowns as tourist spots in Yokohama, Kobe and Nagasaki. *Geographical Review of Japan*, **76**, 910-923.
Yamashita, K.（2013a）: Ikebukuro Chinatown in Tokyo: The first "new Chinatown" in Japan. Wong, B. P. and Tan, C. eds., *Chinatowns around the world: Gilled ghetto, ethnopolis, and cultural diaspora*. Brill, Leiden, 247-262.
Yamashita, K.（2013b）: A comparative study of Chinatowns around the world: Focusing on the increase in new Chinese immigrants and formation of new Chinatowns. *Jimbun Chiri*, **65**, 527-544.

英文タイトル

Method of Fieldwork for Study of the Ethnic Chinese and Chinatown: A Consideration Based on the Author's Experience

YAMASHITA Kiyomi